

第 85 回評価専門調査会が出された意見等の整理メモ

平成 23 年 6 月 27 日
評価専門調査会事務局

1. 総合科学技術会議が行う研究開発評価に関する意見等

総合科学技術会議での評価の役割	<ul style="list-style-type: none"> ・大綱的指針を作ることは総合科学技術会議の重要な役割であるが、評価については屋上屋になっているのではないか。総合科学技術会議でやるべきことはなにか。やるべきことだけをやって、やらなくてもいいことはやらないという仕分けをすることも大事。
選定基準の見直し	<ul style="list-style-type: none"> ・評価の対象とすべき該当がない年が続いているのは、基準が合わなくなっているからではないのか。基準を見直すべき。 ・第 3 期基本計画の延長線で議論するのであれば現状のままでよいのではないか。第 4 期基本計画に向けて議論するのであれば金額と別の視点で議論すべき。
評価対象(選定基準以外のもの)	<ul style="list-style-type: none"> ・評価対象としては小規模のプロジェクトの集合体としてのプログラムよりも単一のプロジェクトを優先すべき。 ・事前評価を実施していないものでも 300 億を超えるものがある。 ・グローバル COE や 21 世紀 COE といった 1000 億以上使っている人材育成関係のプログラムの扱いをどうするか。

2. 評価システム全般に関する意見等

イノベーションの視点からの評価の在り方(イノベーション政策に係るものを含む)	<ul style="list-style-type: none"> ・イノベーションとつuitことにより評価の仕方は当然変わるのではないか。 ・これまではプロセスイノベーション、プロダクトイノベーションを中心に議論してきたが、これからはマーケットイノベーション、サプライチェーンイノベーション、ビジネスモデルイノベーションも含めて議論すべき。 ・イノベーションを主要な目標にした研究開発を行っていく上では、研究開発について実証から実装までを視野に入れたプランニングが重要。 ・課題解決型(イノベーション指向)の研究と curiosity 指向の研究では評価軸が違うのではないか。
--	--

	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎研究でも、イノベーションの場合と同様に波及効果は重要。例えば、最初に設定した課題よりも波及効果の方が大事になる場合があり、そういうものを積極的に評価する枠組みも必要。 ・イノベーションは研究が終わったらそれで終わりではない。社会的・経済的な効果を検証するため追跡評価は実施すべき。 ・イノベーションドリブンな研究開発という戦略をとるためには、それぞれの研究開発に固有のタイムフレームにあった段階で、追跡評価までやっていくアプローチが必要。
<p>PDCA サイクルの確立</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・国の研究開発の場合、政府自らが使う政府調達にどれくらい結びついているかという視点が追跡評価の視点として必要。 ・評価結果の活用については、評価対象プロジェクトだけではなく、他のプロジェクト等への横展開を図っていくことが必要。 ・事後評価が終わるとその案件の予算が終了し、次の施策はゼロから予算提案されるということで、次の施策の資源配分に影響を与える仕組みがない。 ・評価の指摘事項に対するアクションのところをなんとかしないといけない。 ・アメリカの P0 みたいにきちっと出口まで責任を持つ存在が日本にはない。そういう仕組みが必要ではないか。 ・たとえば、日本の R&D の投資効率がよくない原因はどこにあるのかなど、国際比較のベンチマークにより抜本的な改革ができる評価指標を考えるべき。
<p>その他 (効率的、効果的な評価)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・短期で評価をこなすのは大変である。P0 の活用を含めて評価のやり方を考えてはどうか。 ・評価のための評価が多すぎることから、評価の効率化ということをもっと真剣に考える必要がある。